

第二工学部草創期の思い出

東京大学名誉教授 鈴木 弘

話題1. 第二工学部創立当時の建学の意気ごみ

日本一の工学部を建設・育成して行く。これが教官陣営中の合言葉であった。初代の学部長であった瀬藤象二先生が機会あるごとに口にされたスローガンであり、カリスマ性の豊かな同先生の言葉となると説得力が伝わって来た。

麦畑を整地して現在ならバラックといわれかねない木造の建築が並ぶ殺風景なキャンパスではあったが、本郷の7学部を収容する全キャンパスと等面積の16万坪の敷地は将来の大工学部への壮大な夢への連想を駆る力があつた。また10学課3特別教室計65講座の構成にも、東大工学部60余年の歴史と経験とを下敷きとした種々の改革や工夫が折りこまれていて、工学部の構成として理想に向かって一歩も二歩も前進しているとの意識を感じさせられた。

ことに鈴木(弘)にとっては、日本の歴史という以上に世界の大学でも初の塑性加工学(二工では非切削工作学と命名されていたが、実は学生時代から自分の一生の仕事と意中に秘めていた金属塑性加工学)が正式に講座となり、それを担当するという感激があつたので、日本一の工学部への前進というスローガンへ身近な共感をおぼえた。

教官陣も本郷の教授・助教授中の新進気鋭の方々が移籍され、企業の研究機関からの転籍者も大学での研究・教育への転針に理想に燃え、また鈴木(弘)のような大学卒業後3年にも満たない助教授が大勢新任されたこともあって、理想の大学を目指すことへの違和感はほとんどなかった。この空気は後に敗戦、さらに二工から生研への転換があつても、というよりむしろそのような酷い変化の波を被ってなおさらに強まった。ただ理想を推進すべき対象の組織体が二工から生研へと変わったただけであつた。

話題2. 教官食堂

日本の歴史の具体的折り返し点は昭和16年12月8日の日米開戦の日であつたといえる。第二工学部の開設はそのわずか4ヵ月後の昭和17年4月であり、千葉市の西部、人家のほとんどない麦畑50万平米が千葉県の大塚で急遽そのキャンパスと変わったのであつた。

第二工学部のために西千葉駅が総武線に新設されたのは、学生入学の半年後、それまでは教職員・学生は稲毛駅から線路脇を2km歩いて通学した。つまり道路さえまだ完成していなかったというあわただしい開学であつたのだ。

食・住の確保もむろん緊急の要件だつたのはいうまでもない。教官食堂と学生食堂、さらに学生寮がいち早く開設された。関係者の並々ならぬ努力の成果であつたのだろう。本郷のキャンパスに比べ食事の質が遙かに高く好評だつた。

私の助教授着任は、開学後8ヵ月を経た11月であつた。日本の技術力の充実こそ急務と考えていた海軍が、私を技術士官として海軍内での任務にとどめるよりも、大学で学生の育成に当たらせる方が日本のために少しは有益と判断してくれたための人事だつた。

したがって第二工学部開設当初の先輩の先生方の徒歩通勤のご苦労も知らないで、一応は軌道に乗っていた正常な助教授の日常活動に入り込めたのは幸であつたが、特に印象が深かつたのが教官食堂での昼食であつた。

といっても、感激の理由は食事の質ではない。確かに東京でも早並の大学教授の食膳には登るまいと思われる海の幸がしばしば供せられたのは有難いことではあつたが、最大の感激は学生時代遙かに仰ぎ見た大先輩の有名教授と一堂に会しての会話を交わしながら食事ができる雰囲気であつた。

第二工学部の教官陣は、本郷の工学部から転出された方以外に、他大学からの転任、産業界で大きな業績を挙げその専門の第一人者として著名な方、私と同様卒業後間もない気鋭の研究者の卵などの混成部隊だつた。そして、学部長の瀬藤先生はカリスマ性を感じさせる大型の指導者だつた。混成教官の早急な融和協力を目指されたのであろう。食堂でも積極的に誰かれとなく、若い助教授にも学部長から声を掛けて、常に話題の中心に居られた。

南太平洋に伸び切っていた日本の最前線が、アメリカの反攻にすでに陥ち始めていた頃だつた。敗戦の噂から技術的話題へと移っていく会話の中にも、それぞれの専門に応じてかなり高度の技術談議も交わされた。若輩にとって参考にならない筈もない貴重な話題であつた。

このような耳学問の利もさることながら、食堂での親近感の増幅は、専門の分布と年齢差とを越えて研究と技術との具体的討論にまで発展して、昼休みの時間を越えて数人が残り、真剣な討論を交わす風景も珍しくなかつた。

異なる専門の境界領域に新しい研究テーマが生まれ、さらに発展して予想もされなかつた新しい学問体系の誕生へと発展して行く可能性は、未知の領域への進展を使命とす

る研究活動にとっては貴重な宝物である。教官食堂がその可能性を育む温床の役割を演じた。このような空気をたたえていた教官食堂は、当時の日本の大学では稀有の存在であり、特に若い助教授・講師にとっては視野を広め研究を加速するのに役立つ点が少なくなかった。

後に第二工学部が廃止されて生産技術研究所が誕生して

後にも、専門の境界を越えて多数の教授・助教授の協同研究組織が組織されて、大型プロジェクトが次々と誕生し、大きな成果を挙げたが、これにも第二工学部創立以来の異なる専門の教授・助教授間に一体感が存在していて、研究協力が容易に踏み込む体質が、伝統となって貢献しているのである。